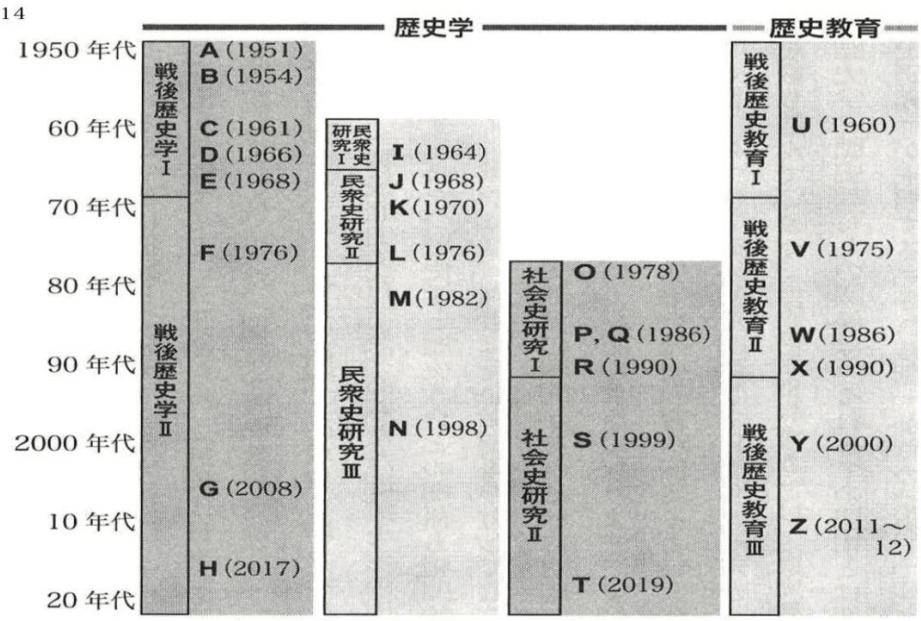
3:19
歴史像を伝える「歴史叙述」と「…
完了

【γ】同 1956 年 7 月 27 日　【β】同 1957 年 1 月 20 日　【α】『朝日新聞』1959 年 12 月 27 日

図14



戦後歴史学

A 遠山茂樹『明治維新』 **B** 江口朴郎『帝国主義と民族』 **C** 丸山真男『日本の思想』 **D** 大塚久雄『社会科学の方法』 **E** 橋川文三『ナショナリズム』 **F** 中村政則『労働者と農民』 **G** 荒井信一『空爆の歴史』 **H** 吉田裕『日本軍兵士』

民衆史研究

I 色川大吉『明治精神史』 **J** 田中彰『未完の明治維新』 **K** 高木俊輔『維新史の再発掘』 **L** ひろたまさき『福沢諭吉』 **M** 内海愛子『朝鮮人 BC 級戦犯の記録』 **N** 牧原憲夫『客分と国民のあいだ』

社会史研究

O 良知力『向う岸からの世界史』 **P** 二宮宏之『全体を見る眼と歴史家たち』 **Q** 遅塚忠躬『ロベスピエールとドリヴィエ』 **R** 川北稔『民衆の大英帝国』 **S** 谷川稔『国民国家とナショナリズム』 **T** 峯陽一『2100 年の世界地図』

戦後歴史教育

U 上原専禄編『日本国民の世界史』 **V** 加藤文三ほか『増補版 歴史教育の資料と扱い方』 **W** 加藤文三・本多公栄・吉村徳蔵『100 時間の日本史』 **X** 吉田悟郎『自立と共生の世界史学』 **Y** 加藤公明『日本史討論授業のすすめ方』 **Z** 小川幸司『世界史との対話』

歴史像を伝える

「歴史総合」を手がかりとして「歴史の学び方」を考えてきました。

「歴史総合」は、(α)「解釈と言う営み」(歴史は解釈であるということ)を前提とし、(β)その「解釈」の複数性と議論の保証を行い、歴史知識を歴史認識ー歴史的思考力を養っていく科目です。

つまり、歴史を学ぶこと=「事実」を学ぶと言う考え方に対し、問いかけにより歴史は動き出し、様々な形を見せてくると言うこと。

そして、そのために、対話と議論が必要とされるということです。

歴史の「事実」とされるものは、時代や立場からの解釈によっており、対話や議論を通じて共通の認識となっています。

ことばを変えれば、絶えず後世への更新の道が開かれているということです。

また、「歴史総合」は、(γ)アイデンティティーとしての歴史と、「他者」との出会いとしての歴史を学ぶ科目ともなります。

γは、自らの営み(α・β)を「私たち」以外の人々とも遂行しているということを知り、「他者」の発見になるということです。

歴史が解釈に基づくと明示することは、どう解釈してもいいと言う歴史相対主義の立場とは対極の考え方です。

あらゆる解釈が可能ではないことを知り、自らの解釈を練り上げ、説得力を持つように述べること―この営みを、対話と議論によって遂行していくことが「歴史総合」の学習ということになります。

解釈であるがゆえに、根拠と論理が大切であり、単純化や一方的な断定は許されないことを学ぶのです。

「歴史総合」は、様々な可能性を有した科目として考えることができます。

戦後の長い時間をかけて積み上げられてきた歴史学と歴史教育の営みを、あらためてそのメタフィジカルな次元から問う姿勢が織り込まれています。

「歴史総合」に即して存じてきましたが、ことは、歴史教育の全体に通じることであり、さらには歴史を学ぶことそのものに関わります。

(いま)歴史を学ぶことの意味と意義、方法と実践が、ここから受け取れることでしょう。

「歴史総合」を学ぶ事は「歴史総合」で歴史を学ぶということに通じていっています。

2 つのことを、最後に述べておきたいと思います。

第 1 は、「歴史総合」の新設は、歴史学と歴史教育、及びその関係の大きな変化の所産ということです。

「歴史総合」は、ここ 30 年ほどの歴史学の模索、歴史教育の幾多の試み、そして双方の対話の動きの結晶であり、それを示す 1 つの形となっていると言うことです。

本書のあちこちで述べてきましたが、戦後日本の歴史学は、日本史研究に軸足を置いた時、(A)「戦後歴史学」(第 1 期)として再出発し、「戦後歴史学」が自己変革を行いつつ、新たな潮流として(B)「民主主研究」(第二期)、(C)「社会史研究」(第 3 期)が登場すると言う流れを有していると、私は把握しています。

歴史学は、全体的なパラダイムチェンジはなされず、3 つの潮流が併存すると言う認識から、「近代日本史と歴史学」(中公新書 2012 年)で、この流れを概観しました。

また、現行の歴史教科書は(A)「戦後歴史学」の枠組みに準拠し、(B)「民衆史研究や(C)「社会史研究」の成果を取り込んで執筆されています

同様に、「戦後歴史教育」も、新たな潮流を生み出すとともに、3 つの層が併存していると思います。

また、歴史学と歴史教育との関係も相関的な 3 つの働きとして整理できるだろうと思います。

戦前には、両者はお互いに関係を有しておらず、戦後になっての提携が図られますが、歴史学の潮流と歴史教育の展開がそれぞれに対応していると考えられます。

簡単な図示を試みれば、先のようになります。

(A)「戦後歴史学」と「戦後歴史教育Ⅰ」との関係は、歴史学の成果を歴史教育が伝えると言う姿勢であり、(B)「民衆史研究」と「戦後歴史教育Ⅱ」は、総対的な関係こそ目立ちませんが、歴史教育の主体的な試みが歴史学の成果を取り込んでいます。

「戦後歴史教育Ⅱ」は、歴史教育の独自の役割を強調します。

総体的な歴史学と歴史教育との関係は、これまでの様相とは変化を見せてきます。

しかし、(B)「民衆史研究」が主唱する「される側」からの歴史、「にとっての歴史」は、生徒たちの「私」に訴えかけ、個々には関係が見られたと思います。

それでも、(自由民権運動で弾圧された運動家たちをめぐる)「顕彰」や「民衆史掘り起こし運動」の成果を教室で伝

えることなど、歴史学者と歴史教育の間では温度差が見られました(成田龍一「次世代に知を伝えるということ」「危機の時代の歴史学のために」岩波書店 2016 年)

「戦後歴史教育Ⅲ」はその後の動きとして、現在進行中です

歴史学が(C)「社会史研究」として大きな転換を試みる中、歴史教育における模索とともに動いているように見えます。

歴史教育の問題提起を歴史学が受け止めるようとしているように、私には見えます。

(C)「社会史研究」のひとつの姿勢は「問いかけの歴史学」(二宮宏之)ですが、「問い」こそは歴史教育が核心としていたことであり、また「歴史総合」の主張ともなっています。

歴史学と歴史教育の新たな動きの中に「歴史総合」が生み出されています。

そしてこの事は、教室の中に留まらず、(いま)を見る目を鍛え、歴史的な現在として(いま)を把握する姿勢を培っていくことになるでしょう。

第二は、「歴史総合」と言う親切科目によって、長く続いた「日本史」「世界史」による戦後の歴史教育が大きく変わったと言うことに関連します。

「日本史」「世界史」と言う体制が作られたのは 1949 年のことです。

この年、かつての「国史」が「日本史」になり、合わせて「西洋史」と「東洋史」が合体して「世界史」が誕生しました。

その後、1989 年に「社会化」が解体され、地力家と公民家に分化されることに伴って、日本史 A B」「世界史 A B」となります。(高等学校学習指導要領)

日本史世界史の科目はともに原子古代から中世、近世、近代、現代までの通史であり、日本史、世界史の科目は近現代を通史としています。

それでも日本史、世界史の区別は良持されましたが歴総合はその区分をなくしたと言う点で大きな変更となりました。

世界史科目の誕生と言う観点からこのことに焦点を当ててみましょう。

折茂 1949 年歴史学研究会は「世界史の基本法則を大会テーマに考えました。

「原子協賛性」「奴隷性」「封建制」「資本主義」(社会主義)として停止化し、すべての人類社会を貫く論理として議論を行います。

発展段階論で一報 1 方向の端系列な法則であるとともに、ヨーロッパ社会の歴史をモデルとしたものですが、マルクス主義の歴史館、また大塚久雄の歴史館と重なるものでした。

今から考えるとかなり単純化ですが、戦前の広告士官への反発と戦後における歴史学の再出発の端重視となりました

歴史教育の世界史の開始と歴史学の世界史の行法則」への関心は、この時期の歴史教育歴史学の関心の素材を示しています。

世界史の意識と理論(岩波書店、1907 年を表し、戦後から世界史意識をたどった、成瀬理は、1950 年前後には多くの世界史外説を命打つ書物が出されたこと。

しかししっかりした方法論を踏まえ、伸之介に有機的な構成を持つ世界史叙術」とは言えなかったと存じています。

そして成瀬は続け、1950 年代半ばに至り、2 つの流れを有機的に見つける。

新たな観点を設定し、その観点から世界史を再構成しようとしている。

具体的な試みが見られ、決定的とも言える影響を与えたのが上原 1006 による世界史観であるとしました。

上原は近年でも世界史像を追求した 1 人として多く言及されているようになっています。

上原「歴史意識に立つ教育「」国土車 1950 年を収められた「日本国民のための世界史教育」(1905 年用は「上原 1006 著作州」第 12 巻評論舎 2000 年に行った」閉じは当面の課題として世界史教育の必要を力説します。

上原は(1)「日本国民とか、日本民族とか日本人とか言う具体的なものを前提として(上原線 6 の用語では「予想」(2 教育を学問研究に依存するが、従属はしないと言う観点から存じます。

そして、世界史教育の目標意味を近代的市民としての人間にとって、必要書くことのできない社会意識社会的自覚を与えると、同時に近代的市民にふさわしい知的教養を与える(デモクラシー」を含むこととします。

2 つの点が強調されます。第一は政治との関係です。

第二は世界史の内容です。日本史や東洋史や西洋史の個別研究が世界史研究の意味を持つためには、独自の世界史研究というものがなくてはいけないとします。

私たちにとって大事なのはそのような国の違い、違った口がどのように関係しあっているのか、そのような関係の

仕方は一体どうしてそうなっているのかということをはっきり掴むことといいます。

　上原が言うのは「人間」が抽象的に存在するのではなく「あるものは日本人であり、中国人であり、アメリカ人であるのだ」歴史的、政治的、文化的社会的伝統と問題と担いながら、直に人間が人間として存在するということです。

　学問研究個別研究を世界史としていくために、教育と言う領域実践とそれをまとめ上げる「日本と言う「閉じ」と立場、そして国民と言う集団を介して人間を探求することが主張されます。

　現時の「近代的市民」にとって不可欠のこととするのです。